

エル・
El camino

ミゲル・デリーベス
Miguel Delibes

喜多延鷹 訳

カミーノ [道]



彩流社

ミゲル・デリーベス

エル・
カミーノ [道]

喜多延鷹[®]

彩流社

〈著者略歴〉

ミゲル・デリーベス (Miguel Delibes)

1920年、バリャドリード生まれのスペインを代表する現役の作家。
「糸杉の影は長くなりて」でナダル賞を受賞し、第三作目の本書で
文壇に確固たる地位を築き、今日に至るまでスペイン文学のリーダー
の一人として活躍している。

作品に「ねずみ」「獵人日記」「マリオとの五時間」「赤い紙」
「落ちた王子様」「無垢なる聖人」最近作に「異端者」などがある。

〈訳者略歴〉

喜多 延鷹 (きた・のぶたか)

1932年 長崎市生まれ

1956年 東京外国語大学イスパニア語学科卒

現在、和光大学、神田外語大学、東京理科大学、獨協大学
でスペイン語を担当。

訳書 フワン・ラモン・サラゴサ「殺人協奏曲」(新潮社)

ミゲル・デリーベス「好色六十路の恋文」(西和書林)

ミゲル・デリーベス「灰地に赤の夫人像」(彩流社)

星新一「最初の説得」「ある研究」(スペイン語訳＝共訳)

“Relatos de la tierra y del entorno” (Editorial Popular S.A., Madrid)に収載。

エル・カミーノ (道)

2000年 3月 3日 発行

定価はカバーに表示してあります

著 者 ミゲル・デリーベス

訳 者 喜 多 延 鷹

発行者 竹 内 淳 夫

発行所 株式会社 彩 流 社

〒102-0071 東京都千代田区富士見 2-2-2

電話 03(3234)5931 Fax 03(3234)5932

http://www.sairyuusha.co.jp

e-mail sairyuusha@mtg.biglobe.ne.jp

印刷 (株) 平河工業社

製本 (有) 青木製本

目次

エル・カミーノ（道）

3

訳者あとがき

225

本書の出版について、スペイン文化省のグラシアン基金より一九九九年度の助成をいただきました。
La realización de este libro fue subvencionada en 1999 por el Programa "Baltasar Gracián",
del Ministerio de Cultura de España.

別にそうならなくてもいいのになぜかそうなってしまった。当年十一歳になるミミズクダニエルは、心の底からことの経過を悔やんでいた。もっとも、これは避けられない宿命的現実として受け入れている。父が少年には家業のチーズ作り屋より、もっとまじな仕事をさせたいと望んできたことでは父を尊敬できても、同時にそのことが少年を戸惑わせていた。

父はこれを出世だと理解していたが、ミミズクダニエルは本当のところそれが分からない。少年が町に出て上級学校で勉強することは、長い目でみると出世のひとつかもしれない。薬剤師の息子のラモンはすでに弁護士を目指して町で勉強していた。休暇になり帰省すると、ダニエル親子を訪れては孔雀のように傲慢な風を吹かせ、彼らをまるで小馬鹿にしたように肩越しに見下ろす。日曜日や大事な祝祭日には、ミサが終って外に出てくると、大聖人ホセお坊様が説教壇でなさったお話の言葉尻を捕えて、平然と批判する。もしこれが出世するという意味なら、町へ行つて上の学校で勉強を始めることは、確かに出世の基本ということになるのだらう。

しかし、ミミズクダニエルの頭の中では、この点多くの疑問が渦巻いていた。自分では人並みの知識を持っていると思つてゐる。すらすらと本が読め、人に分かつてもらえるような文章も書け、算数

の加減乗除もできれば、応用問題もできた。考えてみると、ごく普通に成長した人間の頭脳には、この年ではこれ以上のことは大して詰め込めるわけではない。しかしみんなの話によると都会では高校の勉強は七年かかり、さらに大学で少なくとも高校と同じ期間高度な勉強をするということだ。世の中には一つの事を知るのに、今のダニエルの年齢より三年も多い十四年間も努力がいるような、そんなものが存在するのだろうか。きつと都会では時間をむだにしているに違いない、とミミズクは考える。十四年の勉強をした結果、ヒワとカケスの見分けもつかない、牛糞と馬糞の違いも分からない人間が出来上がるのではないか。人生とは奇妙で馬鹿馬鹿しく、気紛れなものだ。役立たずのむだなことにみんなが精を出しているのではないだろうか。

ミミズクダニエルはベッドの中で寝返りを打った。鉄製の古いベッドのスプリングがギイッときしんだ。ベッドに入って、すぐ眠れないなんて生まれて初めてのことだ。しかし今夜は考えることがたくさんある。明日はきつと考え事をする時間などないだろう。午前九時ちようど、上りの急行に乗っているだろう。村とはクリスマスまでお別れなのだ。三か月は学校の中に閉じ込められたままだ。ミミズクダニエルは空気が不足しているような気がして息苦しくなり、二、三回深呼吸をした。出発の場面を思い描いた。友人の牛糞ローケは、真の男というのは、たとえ父親が亡くなっても泣かないものだ、言ってくれたが、それでもいざその時になると涙をこらえられないのではないかと考えた。牛糞も只者ではなかった。ミミズクより二つ年上だが、高校には行っていない。もつとも高校に入っても、入らなかっただろう。鍛冶屋パコは息子の牛糞が立身出世するのを望んでいなかった。自分のように鍛冶職人になり、鉄を自分の思いのままの形に作ればそれでよい、と思っていた。鍛冶屋の

仕事って、素晴らしいのだ。鍛冶屋になるには学校の勉強なんて十四年も、いや十三年、十二年、十年、九年だって、いや一年だって必要ない。そんなことをしなくとも、牛糞の父親がそうであるように、逞しい大男になれるのだ。

ミミズクダニエルは、鍛冶場で鉄を自由自在に扱っている鍛冶屋パコを見ていると、決して飽きることがない。筋肉や腱をもりもりさせ、まるで木の根っこのように太く、赤毛に覆われた前腕には思わず見とれてしまう。きつと鍛冶屋パコはりっぱな両腕のうち、片腕だけでダニエルの部屋の小物入れ^{たんす}筆筒を楽々持ち上げるに違いない。では、パコの胸部は何にたとえたらよいのだろうか。鍛冶屋はよくTシャツを着て仕事していたが、パコのヘラクレスのような胸は、呼吸のたびにまるで傷ついた象のように上に上がったり、下に下がったりした。これぞまさしく男だった。そこへいくと、薬剤師の息子のラモンはまるで気取った女の子のようにめかし込みお高く止まっていたが、なよなよして青白かった。もしこれが立身出世なら、断固として立身出世は望まない。ダニエルとしては二頭の乳牛と小さなチーズ小屋と、家の後ろのごく小さい野菜畑を持てればそれで十分だった。それ以上は望まない。作業日には父親のようにチーズを作るだろうし、日曜日には鉄砲を持ち出して狩を楽しむだろう。そうでなければ川にマス釣りに行くか、ボーロ「九柱戯」ボーリングに似た遊び」競技の環の中に入り、一戦交えるかだ。

出発のことが頭に浮かぶと、ミミズクダニエルは気分が滅入った。床の割れ目から階下の光が漏れてくる。光線は無用にも二階の天井にまで達していた。これから三か月間この青白い光の糸や、家事にいそしむ母の静かな物腰を目にすることも、いつも不機嫌な父の突き放すような荒々しい小言を耳

にすることもできないのだ。開け放しの窓から入ってくる刈り取ったばかりの干し草の匂いに干からびた牛糞の臭いがからみ合った淀んだような空気を呼吸することもなく、この三か月を過ごすのだろうか。なんと長い三か月だろう。

都会に行かせるという父の目論見に反対しようと思えばできた。だが、今となつてはそれは遅い。何時間か前まで母は、ダニエルが持つて行く衣類を揃えながら、すすり泣いていた。

「ねえ、いいかい、ダニエル坊や。これはお前のシャツだよ。名前の頭文字を印につけておいたよ。こつちはTシャツ、これはパンツだよ。それと靴下。みんなお前の頭文字入りだよ。学校じゃ、生徒が多くて、印でもつけとかなきゃどこに行っちゃかわからないからね」

「ミミズクダニエルは、何か大きくかさばった異物が喉に詰まったような感じがした。母親は、まくれ上がった鼻の先っぽを手の甲で拭き、鼻汁をすすった。ふだんは、僕には〈鼻汁吸っちゃいけない〉と言ひ聞かしている母が、自分でそうしているからには、今はよほど大事な時に違いない、とミミズクは考えた。そして、ひたすら込み上げてくるものを抑えていた。

母は続けて言った。

「体に気をつけるんだよ。着物もちゃんと気をつけなくちゃね、坊や。これもみんな父さんのおかげなんだよ、分かっているかい。こちらは貧乏なんだよ。でも父さんはね、お前にひとかどの人間になつてもらいたいと思つていなさるのさ。父さんはお前が父さんみたいに汗水垂らして働らくようにはなつてもらいたくないのだよ。お前はね……」母は思いに駆られたように一瞬少年を見た。「ダニエル坊や、大きくなつたら、きつとお前、偉い人間になれるよ。母さんや、父さんのことは心

配しなくていいよ」

母はまた鼻をすすり、黙った。ミミズクもそれに誘われて、へそうだ、大きくなったら、偉い人間になるんだぞ、ダニエルと繰り返し自分に言い聞かせた。そして、急に頭をぶるつと震わせた。大きくなったらどうやって偉い人間になれるのか、あまりよく分からないのだ。それを分かうとして長い間考えた。鍛冶屋パコはぐつと張り出している厚い胸板、逞しい背中、硬くて赤い髪の毛、つまり神話に出てくる神様のように野性的で硬い面構えをしていて、とても偉い人間に思える。うちの父さんも偉いところがある。三年前の夏のこと、翼幅二メートルもある大鷹を倒したのだから。しかし、母は話をする時、こんな偉さには少しも触れない。母は先生をしているモイセス様か、二、三か月前村長になられた薬屋のラモン様のような偉さを望んでいるに違いない。両親が望んでいるのはきつと何かこのようなものに違いない。しかし、ミミズクダニエルはこの類の偉さには大して心引かれなかった。いずれにせよ、偉くなることも、立身出世することも好きにはなれなかったのだ。

さつきから胃の中で騒ぎ立っている不安感を幾分でも和らげようと、ベッドの中で寝返りを打ち、うつむきになった。こうしているといくらか楽だ。少しは不安感を抑えられる。しかし、うつむきになっていようと、あおむけになっていようと、どっちみち明日の九時になれば急行に乗って町に行くことは避けられそうにもない。そうなると、万事休すだ。何とかしなくちゃ……。しかしもう遅い。長年父が胸の中で暖め続けて来た計画だ。一時の気紛れで打ち砕くことはとてもできない。父が自分で達成できなかったことを、息子に達成してもらいたいと望んでいるのだ。それも気紛れとは言える。大人は時として、子供の気紛れより遥かに頑固で馬鹿げた思いつきにとらわれる。ミミズクダニエル

は数か月前は、自分の人生がこれで変わるかも知れないと考えると楽しかった。しかし、いざその段になってみると、人生が変わるという思いに、かえって苛まれしうのだ。

もう六年位前になる。ダニエルは父がどんなに自分に期待しているかを知った。大聖人ホセお坊様は、〈他人の話を立ち聞きするのは罪だ〉とよく言っておられた。しかし、ミミズクダニエルは夜床に就いたあと階下で両親が交す会話をよく聞いていた。寄せ木造りの床のすき間から、暖炉、松材のテーブル、腰掛け、チーズ作りの作業台、その他のいろんな器材が見えていた。ミミズクダニエルは床にうずくまって両親の話を盗み聞きした。それは習慣となった。凝乳〔牛乳からチーズの製造過程の豆腐状のもの〕の酸えた臭いや汚れた敷物の臭いといっしょに、両親のひそひそ声が階下から上ってくる。人間のきつい体臭にも似た、乳の発酵するあのツーンとくる臭いを嗅ぐのが好きだった。

父はあの夜、作業台の上で横になっていた。母は夕飯の後片付けをしていた。ミミズクダニエルが、あの光景を目にしたのは六年も前のことだが、自分の人生に深く関わる問題だったので、今でもありありとその時のことを思い出すことができる。

「いや。子供は別だろうよ。信じることだね」と父。「こんな作業台に奴隷みたいに縛りつけられた生活は、子供にはさせられない。おれみたいな生活はな」

こう言ったあと、ののしりの言葉とともに作業台に拳骨を食らわせた。誰かに向かって腹を立てている様子だが、誰に向かって腹を立てているのか、ミミズクダニエルにはよく分からなかった。その当時ダニエルは、人間は時に人生に対して怒ったり、物の道理に対してむしろくやししたり、不平等だと思って怒るものだという事を知らなかった。ミミズクダニエルは、父の怒っている姿を見るの

が好きだった。目は火花を散らし、顔の筋肉は引き締まり、そんな時の父はどこか鍛冶屋パコと似ていたからだ。

「でもね、坊やを手放すことはできないわ」と母。「だってたった一人の息子だよ。あーあ、娘が一人でもいたらよかったのにね。だけど、娘はおろか、もうわたしは小さい子供を生めんようになったしな。リカルド先生はこの前流産のあと、私が子を生めないようになってしまったと、おっしゃったよ」

父はまた口汚ない言葉を口元でつぶやくと、姿勢を崩さず付け加えた。

「もうやめろ。しょうもねえことじゃ。いつまでもぐじぐじ言うんじゃねえ」

母はしくしく泣いた。泣きながらテーブルの上に散らかっているパンくずを拾い集めては、錆びた空缶に入れていた。そして未練がましく弱々しく言った。

「多分うちの息子は勉強には向いてないと思う。それに時期も早過ぎる。だいいち都会に子供を出す、お金もよけいかかるしね。薬剤師のラモン様か、裁判官様だったらいざ知らず、私らみたいな貧乏人にはね」

父はかき回し棒を両手にもつと、いらいらいと牛乳をかき回し始めた。ミミズクダニエルは、父が母の痛みを募らせないように、自分を抑えているのが分かった。少し間を置くと言った。

「そのことはこのわしにまかしてくれ。子供が勉強に向いてるかどうかは、つまりゼニを持つてるか持つてねえかの問題よ。わしの言うことが分かるかね」

父は立ち上がると暖炉の火掻き棒ひかきを手にし、置き火をかきほぐした。母は荒れて弱々しくなった手

を膝に置いて座っていた。急に疲れと無力感に襲われ、理由もなく虚ろで孤立無援な自分を感じていた。父はまた母に向かって話しかけた。

「もう、決まったことじゃ。このことでわしにこれ以上話をさせんでくれ。子供は十一歳になったらすぐ町へ行つて勉強させる」

母は降参したようにため息をついた。もう何も言わなかった。ミミズクダニエルは横になって眠った。母が言おうとした言葉をあれこれ考えてみた。流産のあと不妊症になってしまったということはどんな意味なのだろう。

ミミズクダニエルは石女^{うますめ}とか流産^{りうさん}がどんな意味かを知るようになった。ダニエルは今、友達^{ともだち}の牛糞^{ごうふん}ローケのことを考えている。牛糞^{ごうふん}ローケと友達^{ともだち}になつていなければ石女^{うますめ}とは何か、流産^{りうさん}とは何か、おそらくまったく分からないままだったに違いない。しかし、牛糞^{ごうふん}ローケは「あのこと」をととてもよく知っていた。母はダニエルに、ローケと遊ばないように、と言った。理由は、牛糞^{ごうふん}は母親の手で育ておらず、汚いことをたくさん知っているからだ、というのだ。赤トウガラシ姉妹も、牛糞^{ごうふん}と付き合うのはおよし。いっしょにいるだけで不良になる、とよく言っていた。

ミミズクダニエルはいつも牛糞^{ごうふん}ローケを庇^{かば}っていた。村人たちは牛糞^{ごうふん}のことを理解していないか、それとも理解しようとしなかった。ローケが「あのこと」をたくさん知っているからといって、そのまま不良とは限らない。闘牛^{とうぎゅう}牛か、それとも鍛冶屋^{かじや}をやつてゐる彼の父のように力が強いからといって、それが即悪党^{あくどう}ということにはならない。彼の父の鍛冶屋^{かじや}が炉^ろのそばにいつもワインの袋^{ふくろ}を置いていて、時々袋^{ふくろ}を持ち上げたところでアルコール中毒^{ちゅうどく}というわけではなく、牛糞^{ごうふん}ローケが蛙^{かえる}の子は蛙^{かえる}から生まれるという生命再生^{せいめいさいせい}の仕組みをよく知っていたからといって、牛糞^{ごうふん}ローケが不良であると断定することはできない。しかし、あることないことローケを取り巻くこの状況によって、ローケは評判^{へいばん}がよく

なかった。ミミズクダニエルは十分このことを心得ていた。なぜかといえば、だれにもまして牛糞とその父親をよく知っていたからである。

鍛冶屋パコのかみさんが牛糞を生んだあとすぐ亡くなったのは、誰のせいでもない。女としてはぶっさらばうで生一本過ぎるきらいの牛糞の姉のサラに、教育の力が足りなかったとしても誰のせいでもない。

サラは母親が亡くなってからというものの、ずっと家の中を取り仕切ってきた。太くて硬い赤毛と骨太でがっしりした体つきは、牛糞と同じく父親譲りだった。時々、ミミズクダニエルはローケの母親の早世は、きつと赤毛でなかったからではないかと想像した。赤毛はひよつとすると、長生きの印であり、少なくとも一種のお守りなのかも知れない。原因が何であれ、牛糞の母は牛糞を生み落とすすぐ亡くなり、彼より十三歳年上のサラ姉が、弟をめちゃくちゃに育てた。サラは忍耐力がなく、口喧しく、潔癖過ぎる性格だった。半狂乱の、物凄いい形相をしたサラが凄まじい叫び声をあげながら、弟のあとを追って階段を駆け下りて行く場面を、ミミズクダニエルは何回も見ている。

「けだもの！ けだものよりひどい！ 前世はきつとけだものよ！」

その後もダニエルはサラのこの口癖を何百回、何千回と聞いたが、牛糞ローケには蛙の面つらに水だった。サラの性格が悪くなり、ひねくれたのは、母親の死によって家庭教育が急激に破綻を来したのが原因に違いない。一方ほんの子どもだというのに、牛糞ローケは幽霊、妖怪、お化けなどの類をいっさい怖がらなかった。ふつうの人間ならちゃんと皮膚の下には筋肉や骨があり、血も流れている。そんな普通の人間の実態を持たない者に対して超然としておれたのは、きつと彼の頑健な体格のせい

違いなかった。サラが、へほらそんなことしてるとお化けがくるよ、ローケ」と言つて脅しても、牛糞はニヤニヤと笑つて姉さんに反抗していた。「いいよ、来るならこいだ」当時、牛糞はやつと三歳になつたばかりで、あまり話ができなかった。いくらサラが脅しても、それ以上は、牛糞には通用せず、サラはくやしくて仕方がなかった。

だんだん牛糞は大きくなつて行き、サラは他の懲らしめの手段を考えた。ローケが悪戯をするとなら納屋に閉じ込め、くぐもつた声で、ゆつくりと神父さんが読む臨終の祈りを外から読んで聞かせた。ミミズクダニエルは、友だちの牛糞の家を初めて訪れた時のことを今でも思い出す。道に面したドアが半開きになつていて、内側には誰もいなかったし、物音もなかった。まるで誰も住んでないようだった。二階に通じる階段は、どうだ、上れよ、と言わんばかりに目の前に立つていた。階段の手すりに手をかけてみたものの、ミミズクは上に上ろうとはしなかった。サラのことは人伝で聞いて知つていた。嘘のような静けさが何とも不気味だった。玄関のタイルの間をすり抜けようとしていたトカゲを捕まえて、少しの間気晴しをした。不意に高い所で、怒り狂つたような悪口雑言が立て続けに聞こえた。続いてボタンとドアを乱暴に閉める大きな音がした。少しおずおずとだが、ようやく決心がつくと呼んだ。

「牛糞、牛糞」

とたんに喧嘩腰の言葉が頭上から浴びせられた。ダニエルは身をすくませた。

「そんな風に人のことを呼ぶのはどこの誰だい。ここには牛糞なんて子はいないよ。この家じゃ、みんなえらい聖人様の名前を頂いて付けてるんだよ。とつとと失せろ」

それにしても、ミミズクダニエルはあの時なぜ想像のようにその場に立ち尽くしてしまったのか理由は分からない。実はというと、硬^{こわ}ばって口が聞けなくなり、呼吸もできなくなってしまうていたのだ。ダニエルはその時サラが二階で何か声を挙げているのを聞いた。耳を澄ませた。階段の吹き抜けから、もったいぶった大げさで憂鬱^{ううつ}そうな言葉が雨のように落ちてきた。

「わが足、動きを失い、この世の命終りに近づけるを告げられし時……」『魂の勧告』臨終に際し、司祭によって昔行われたが、現在はない

そして、その後に牛糞のまるで井戸の底から聞こえてくるような、鈍くひそかな声がした。

「慈しみ深いイエズス、私をあわれみ給え」

サラの声の抑揚はしだいに虚ろに大げさになっていった。

「迫りくる死の恐怖によりて飛び出したわがガラスのごとき眼、瀕死の目差しを神に注がん……」

「慈しみ深いイエズス、私をあわれみ給え」

ミミズクダニエルは氷のような得体の知れない恐怖に取りつかれた。その物悲しい連棒^{れんぼう}（先唱者の一つ一つの祈祷語句に対して会衆が同じ一連の祈願で答える祈祷形式）は、ダニエルの骨の髄^{ずい}までむずむずさせた。しかし、ダニエルはその場所から動かなかった。ダニエルの好奇心はとりとめがなく、どこか冷めていた。

「五感の働きを失いし時……」サラの単調な声が続く。「この世はすべてわが視界より消え去り、断末魔の苦悶の中、われ死の恐怖の呻^{うめ}き声を挙げん」

眠気に襲われて沈んだ牛糞の音が、また納屋から洩れてきた。間延びしている。